

幸田露伴の芭蕉観

— 思いやり・まこと ↓ うた —

高 羽 四 郎

1 前書き 幸田露伴は諸分野にわたって視野のまことに広い人である。そのうえ考えの奥が深く、心の丈が高く、限界は筆者の目の届かない所にある。ただこの人が物を見、事を考える時の、心の態度や方向にはいつも大よその決まりがあることを感ずる。これもやはり霧中を見透かすようなことであるが、私なりの模索を試みる。觀察の対象は俳人芭蕉に言及する類の作品とする。範圍は極度に狭小であるが、資料は必ずしも不足に過ぎることはないと考え。露伴は早くこの古人に親しみ、敬重の念は終始衰らなかつたと推測せられる。敬愛尊重の意を直叙する例文から初中後三期のものを選んで、前書きとする。

1 我は我を殆んど芭蕉に奪ひ去られて評すべき言を出すところを知らず。微々たる一句のために或は悲しみ、或は楽しみ、遂に或時は泣き或時は畏れ或時は歎喜するに到りしが、愛に到つて愛念火の如く熾んに、旅行の間も尚は翁が句集を、懐より離し去るを得ざりき。(「芭蕉と其角」 明23・10 — 全集15・一一)

この一文が發表せられる少し前の七月前半は群馬県赤城山下に滞在しており、その時も『俳論一葉集』の発句編を携えていたことが、『地獄炭日記』に見える。なお

幸田露伴の芭蕉観 — 思いやり・まこと ↓ うた —

同じ旅先から坪内逍遙に送つた手紙があり、全集39に載つている。蕉句を味読吟誦する当時の心境を細かく切に報ずる一書である。

2 よく視れば薺花なつなさく垣の根の春、春は在らざるところも無きなり。天意は幽草をあはれみて恵む、恵みの在らざるところも無きなり。芭蕉や李玉谿や、其の心の対へる境の何ぞやさしくして其の眼の観じたる世の何ぞ美はしき。(「ひとり言」 大3 — 全29・四二八)

芭蕉の同じこの句「よくみれば薺花さく垣ねかな」(続虚栗上・I春部二五)について同じ評者はまたこう記す。「薺の花は花としては小さく見どころも無い花である。それに眼をとめたところが此の句の心である。「よく見れば」と「花さく」との言葉に力を入れて見なければならぬ。」(「芭蕉俳句研究」その四 大10 — 全25・三〇五)。小さな花に目をとめた古人と細かな心使いの行き届くこの判者とまことに静かで安らかである。

3 芭蕉招宴の献立かくの如し、人は或は其の寒素をあはれまむも、我は其の清淡を悦ばむ。(「芭蕉、利久の食單」 昭16・5 — 全31・三五九)

露伴後年の数少ない著書の一つに「蝸牛庵談話」がある。内容の多面な題材を微かな連想の糸で繋ぎ、それぞれに随想や考証を加えた一集である。同書は先ず芭蕉付句

の一つで初編を書き起し、巻末近い一編がここに引いた「食單」である。元禄七年八月芭蕉が郷里で滞在中、近親の間で月見の宴が催され、その際の歎息表が俳人の自筆で残っている。表をそのまま活字に移して紹介し、品目ごとに説明を添えたのがこの一文である。僅か三葉の記実文に過ぎない。しかも目に見えない古人の「心しらひ」を、深く読んで如実に示す類の文章である。古人への親近が行間に表われ、「これも好し」やそれに類する評語が幾度か重なる。上記の三行は結びの言葉である。

露伴が興味を持った先人たちは種々様々である。名の知られた人もあり、そうでない人もあるが、何れ世のために有益な仕事をした人々である。自身は生涯文章を事としたのであるから、宗教・思想・学術・文芸の先進たちが内外にわたって数の多いのも当然である。それらの評伝を思い、作者の人柄を思えば、芭蕉のような行き方の人にあれほどの関心を寄せ続けたのはむしろ意外な気がするほどである。この古人をどう観察し、どの点に敬意を致したのであるか、自身の評言を引きつなげるだけは項目に分けて考えて行きたい。文中自ずと遠い詩人近い学人の名が交錯することになるけれども、芭蕉を知るのが主眼ではない。露伴の見方、感じ方、考え方が知りたいのであり、引いてその詩観を知ることができればというのが目標である。

Ⅱ思いやり 露伴は絶えず「愛」の尊いことを述べる。愛人・家人に懐く身近かな愛情から、広く世人に寄せる思いやり、さらには一木一石の微をさえ美しいとするいたわりの情まで、「こまやかに心至り深くして、やはらかな人の情」(二瓶の中) 大12—全19・二〇(八)を称えること、この人はまことにしきりである。表題に愛を置く隨筆が前後幾つあることか。結局思いやりに帰する文章は恐らく

全集の大きな部分を占めることであろう。たまたま芭蕉は他に対する温雅の情とりわけ豊かな詩人であり、その句またその人に適うものであったから、おのずと心引かれ、時に学び、時に励まされることもあったのだと思う。露伴はこの愛重する先人のまともった評伝を書き残すことはしなかった。しかし一時期一時期の生伝に当たるものはない訳でなく、「白芥子句考」(全集19)はそのうちの注目すべき一つである。これは一面芭蕉と杜国とが交差する期間の、両者の伝記であるが、一面またこの師弟間の人間愛を描く美しい作品と見ることが出来る。そういう意味で先ずこの一編に注目する。

白けしにはねもぐ蝶のかたみかな——芭蕉(泊船集一・道紀四四)／白芥子に 小畑 上・夏夏句(二七)

の句意が不明だからと人にその解を求められたのがきっかけとなって書かれたものであり、表題もそこから出ている。白けしの句はもともと門弟の杜国に贈った作であるから、考察は門弟の方へ移り、その作品と経歴とが示される。作句は何れも暗く、大きな不安に日夜責められていた人を思わせるようなものであるが、いまは問題外とする。生伝の方はすぐ次に関係あることなので、「句考」に載せるところを抜き書きする。杜国は尾張の彫工、貞享元年(一六八四)

「冬の日」の俳諧に同座して、俊才を發揮。その後何かの罪に問われ、三河湾の対岸渥美半島の先近い一地に隠れる。貞享四年芭蕉が名古屋へ向う旅の路上でこの事を知り、俳弟の越人を同行として遠路辺地を尋ね、杜の不幸を慰め、前途を励ます。同五年(元禄元)の春、杜を促して旅に出立ち、吉野を経て須磨へ吟行(「愛の小文」所載)。元禄三年再度の同伴旅行を図って実現せぬまま、杜はその

春死去。翌四年五月芭蕉は嵯峨の落柿舎に居て一夜杜のことを夢に見、覚めてまた涙を流す。やがて卒然と同地を去る。以上が記事の概約である。これらのことは貞享から元禄の俳書数部を見れば、大よそ知られることであり、また誰しも知っている事柄である。露伴が心を費して確めたいとした杜国の罪状と刑の内容は古俳書などからは得るところがなかった。これは別に地元特志の人の手で発掘せられ、地元諸氏の検討によって決着を見ることになった。空米事件(手持ちでない米穀の売買は当時の違仕に連座して、尾張所領からの追放)というのが事実の由である。(石田元季「俳文学考説」)もし露伴がこの真相を知り得ておれば、考察は随分楽に進んだはずである。その後も新事実が数えられることなく終ったのであろう、作者自身の手による訂正追補の文は世に出ることがなかった。もちろんこの点は塩谷贊(土橋利彦)氏が推量する通り、露伴も上記の発見は聞いていたのであり、そのため自己の「句考」を廃棄したのであったかも知れない(「幸田露伴」中・三三六)。何れにしても「句考」中の杜国伝の部分は大方書替えを要することになっている。だからと言ってこの心を注いで書かれた一編が棄てられねばならぬとは思えない。単に一杜国伝ではないからである。上記の発掘によって露伴の推測がいよいよ適確だったことの判明する箇所があり、ここは反って光を放つてくる。透察はただ杜国の事に懸かるのみではない。それは塩谷氏も指摘する。氏は事例の数々を挙げ、「何も遺っていない手紙一通の存在を推論してその無き能わざるを読者に信じさせるあたりなど、ことごとく掌を指すが如くである。」(前記・三三七)と述べる、その通りである。いまは別に俳人達の人間関係に目を注ぎ、推

幸田露伴の芭蕉観 — 思いやり・まことようた —

量指摘する部分に言及する。貞享年間名古屋・熱田・鳴海など近隣の地、また岐阜・大垣などには著名な俳人の数は多く、その幾人かがここにも登場する。それを描く作者の筆は鮮明、それぞれが個性を持った人格として生動している。さらにその対人関係を探る時の目は鋭く、批判の言葉は厳しい。はたして露伴の推測が妥当であるかどうか、これは筆者の判断を越えたことである。この作者には何の私心もない。ただ真実を求める熱意だけがあって、人の心に訴えるのである。それより注目したいのはこの作品に流れる愛情である。杜国に対する芭蕉の行蔵は全く慈念の表われであり、不幸な一人を哀れみ励ます真情の結果だと露伴は解釈する。貞享四年の往訪慰問のことは言うまでもない、翌年の吉野行も悲運の弟子が出俗の発心を起こすことをひそかに期しての行事だったと推量する。そして露伴自身がまたこの篤厚の古人に深い敬意を懐き、古今相映の人間愛が読む人の心に響いてくる。いまはただ挿話の一つを挙げるだけにとどめる。杜国に一人の従僕があり、主人に付いて離れず、日夜身辺の事を助けていた。その状を見、その誠意に感じた芭蕉は一文を書いて家僕に与え、さらに文末では杜国へ向けて「主も其善を(俳書「刷毛序」ニハのトアリ)忘るべからず」と注意を与え、
先(ま)ず(ず) 宛(ま)梅を心の冬籠り(金野八・「宛句七」先いわへ 刷毛序上・Y初冬四〇)

の一句を添えている。「句考」はこのことを記し、芭蕉の温厚について
4 梅を心の、の句を吟じて、而して此事をおもへば、芭蕉が善を愛し誠を感じる、詩人の敦厚の風格、宛として贈るが如し。既

と評している。「白げし句考」のことはこれだけにする。芭蕉もとより温雅の人、その作品を引いてその点を述べる露伴の評言は調べ切れないほどに多い。目にしたもののうち短い二章を取って、この項の結びとする。

5 初しくれ寝も小裳をほしげ也——芭蕉（翁養上・I冬句）

「ほしげなり」といふところ殊に結構である。自他ありて自他無しである。（『純芭蕉俳句研究』その十一——全25・390）

6 ほそき節より恋つものりつ——曲水

物おもふ身にもの暇へとせつかれて——翁（留蕉）

（ひさこ・I花見二——一三）

芭蕉の句も恋する者に徹底した同情のあるところ、僅々せつかれての五文字に生ける命をもって現はれてゐる。（『俳諧に於ける小説

味戯曲味』昭2・9——全25・五五〇）

Ⅲまこと 「思いやり」もそうであるが、「まこと」はなお一層幅の広い多義の語である。そのうち人に対する誠意というのは、前項Ⅱの内容と実質上連続しそうである。「思いやり」の方を広く解してそれへ含め、誠意はここで考慮外とする。むしろ「自己に忠実」と「事物の真相」と、この二面に重点を置き、後者の方から先に一考する。

a 真実 露伴は学究である。事物の真相や現象の真理を厳しく追求しながらその生涯を終ったと言つても、偏り過ぎた論とは言えないであろう。数多い伝記・研究・考証その他はすべてそうした熱意と努力の結果だと見ることもできる。これらの主題は多種多面、多

くは当面の観察と直接関係がなく、次に記す事柄もそうであるが、著しい例なので一言したい。明治三十七年のころ露伴は幸若舞曲に深い関心を持ち、その考証に意を注いだことがある。当時資料は散逸して、善集がなく、事実も多くは不明のままに棄てられているのを不満とし、原曲正文の収集や故事の探查に自ら当たった。この時の業は後の「新群書類従」・「舞曲」の部、その他数編に結晶している。たまたま斎藤素影（八郎）氏が富山県に在任し、これは調査の上で地理的な便宜の多い所なので、同氏に当てて本文探索やその複写、証跡追求のことなどを依頼する手紙を前後数通送っている。幸いそれが保存せられ、全集39巻にも所載、付いて見ることができ。文辭は時に急激、時に懇切、書簡には珍しい感情的な表現を見せ、その間書者の熱情がくみ取られて印象に残るのである。私信だからこそこうして訴えたのであろう。追求欲は厚くても、その情を公には滅多にしない人である。むしろ逆に真実尊重を自ら確かめるような自制の言葉は散見する。1にも引いた古い論考「芭蕉と其角」の前書きで、芭蕉の伝記を執筆する念に駆られながらも、その意図を棄てる由を述べて、「真を誤るを恐れて」と断っている。遙か後年にもなおこの用意は変らない。

7 自分は今芭蕉に就て何かの談を索められても、願はくは辞讓して何をも語りたくない。何故といへば万一にも間違を語つたりなどすることがあれば、それは後の人の墜^{きざ}跌の原因にもなり得ることであるからである。（『芭蕉と西行・杜子美・黄庭堅』大14・10——全25・五〇八）

露伴は学究である。一度発表した論説を後日訂正増補している例

は挙げるのも煩しいほどである。一方芭蕉はもとより真実の人、別にここで取り立てることをしない。この点に関する露伴の評言を一つだけ付載する。「白げし句考」では吉野行を指して杜国の発心を促がす意も潜められた旅行と見ている点は既に記した。この願いはしかし直ちに実現した訳ではない。高野の山寺に参つた時にも杜国の心境は

ちる花にたふきはつかし奥の院（笈小文・一）芳野四五たふき駈けりいつを告

一四二ノ荒野七・Ⅱ述懐四

と述べる句意の通りである。露伴の意見は

8 已徹の人たる芭蕉より覬れば、疾く世を棄てよと思ふも誠なるべけれど、末練の境にある杜国より云へば、猶身の惜きも実なるべし。芭蕉の此句を採れるも真に即して偽にわたらざればならん。（既出・一七二）

の如くである。未練の弟子に寄せる同情のことはもう問わない。古人がこの句を自己の紀行文中に採録している事実を目して「真に即する」の句だからと推する点に留意するのみ。

対象が一人の経歴、性格の一面、一句の心理というような事柄であれば、直接その事に即して、実状を知り、真偽の見分けが付きうるようにも考えられる。しかし実際にはそれらが自分の心に投げる影や形を見て、判断しているのではなからうか。若し極端に広範なあるいは複雑な事象に向う場合は、相手そのものが既に不明である。ましてそれに直接し、知覚するなどとは不可能のことと言える。どうしても心の内観を時間の次元へ掛けて感じ取るのであれば、客観の真実というようなものでは得られないであろう。次には自分の

幸田露伴の芭蕉観——思いやり・まことしようた——

心に対するまことという問題へ移る。

b 真率 露伴は自己に素直という意味のことをよく言う。手短かな分かりよい一文があるので、先ずそれを借りる。

9 親切は人に対する温みで、真率は自ら己を欺かぬのである。

（『普通文章論』明41・10——全27・二八〇）

この「文章論」は日常用務のために書く文章の心得を述べた一書である。作文の要点として「平易・明確・親切・真率・品位」の五条を挙げ、その第三と第四に関する説明が上の例文である。丁度よい折なので、この言葉を借りてこれまでの小考をまとめておく。先のⅡ「思いやり」は他人に向かう時の態度、この「まこと」は自分に対する関係ということになるであろう。次にはこれら両面が裏を為すような場を求めながら、芭蕉それから詩歌について露伴が言うところを聞くことにする。

明治二十四年まだ少壮のころ文学に志す青年に向つて講演を行いその席で「無際限の心」というのを説いている。

10 無際限と云へば目に人なく、現在の人も過去の人も何も構はぬ唯々我一つで以て自分の感ずる所を發揮するより外にない。

（『木箱退治』——全29・一三三）

これは主として創作者の側に立つ発言であるが、文学を鑑賞研究する人についても同じ用意を、同じく熱い言葉で提唱する。

11 人に雷同せず、又強ひて人に反抗もせず、おのれはおのれの欺かざる純粹の感興に照らして、其の篇什の真価を認めんとするは、……〔文学者の〕必ず有せでは叶はざる条件なりとす。

（『潮待ち草』四十五「文芸の評」——全31・一五四）

これら二文の表わす意味は明白である。文学に限って言えば、「心に素直」は即ち伝統や時潮に拘束されることなく、自己の純粹な感性に従うことを意味し、またこれを文学の必要条件と考えていたことも知られる。露伴は早くから、芭蕉が新しい詩の世界を開き得たのは、当時の風潮であった談林の俳諧に疑問を持ち、やがて自ら感じ自ら信ずるところに立ったことが大きな理由であると判断し、それに言及する文も僅少ではない。いま引いた10も同じ関連から語った言葉であり、次に続く数文も事情は同様である。先ず沼波瓊音の「芭蕉全集」に与えた序文中、この古俳人の創作態度について述べる一節を引用する。

12 自家性情の自然に本づきて、環物節物の万象に酬^むい、矯^ためず飾らず、俳諧と謂ふと雖も必ずしも戲謔せず、古に泥^なまらず世に阿^おらず、俗談平話を忌まずして、而も鄙野淺陋ならず。(「芭蕉全集」序) 大10・12——全32・三四二)

これらの文字に前後する十数行の文章は自己の芭蕉観を諸面からすつかり述べ尽した総論であり、条ごとに敷衍の説明を加えれば、これ以外の数多い関係論文全てを包むことになるであろう。いまはその全部を敬存し、当面に關係ある「自家性情の自然に本づき」の一点にだけ注目する。前例11では「おのれはおのれの欺かざる純粹の感興に照らして」と述べ、さらに10では「唯々我一つでもって自分の感ずる所を發揮する」と言い、その意味は大よそ理解することができる。自己の純粹な感動から文学は出発すべきこと、詩歌はまた純粹な感情の表明であるべきことを言うのであろう。それはよく分かるのであるが、ここで一度翻って考えたい。どうして一人の人の

心から出た言葉が他の人にも響き、その心を打ち、さらには時と所とを越えた人々をも動かすのであるか、つまりどうして「詩」となりうるのか。自己は自己で終り、主観の情はそれなりに消え去るのではないか。この疑問は当然起こるはずであり、露伴もそれに応じている。先の10で触れた同じ談話中

13 詩を作り文章を作るには成るべく長生きをするやうなものを作らねばならぬ。長く生きるのは何かと云ふに、其作者一人の我^がでない者でなければならぬ。……公平無私なる所のものでなければならぬ。(既出・一六)

とも言い足している。そうすると前の「我一つ」の我と、この「作者ひとり」の我でないものと、これら二つはどう違い、どう関係するのであるか。「万人の心」に入りそれを探るといふようなことに触れてはいるが、その手段についての説明はなく、結局「分らぬ。今日では到底私には分らぬ」と言い棄てるだけである。当時話し手は若く、それより聞き手が若く、握り下げることは控えたのであろう。これから九年ほど後、竹柏会の歌人たちを相手にした講演でも似た題目について同じような問題に逢着する。

14 「歌は」我心を種にして起つて来るのであるから、それだけで消滅して仕舞ひさうなものでありますのに、左様でない^と云ふと何か矛盾のやうに聞えますが、決して矛盾と云ふ訳ではございませんぬ。……人間全体と云ふものが一つ／＼に離れて居るものではなくして、互に持合ふやうに出来て居るものでございます。然るに依つて甲の人の感情が乙の人に映り、また乙の人の感情が丙の人に映ると云ふやうになつて居ります。……これは歌其ものの

性質で、是が詩歌の優美にして貴い所以でございます。(「心の画

心の音楽一 明33・4—全24・三五六號)

短歌が歌い手から聞き手に伝わるのは、すべての人の気持が一つであり、感ずるところは同じだからと説く。この点は説明の通り、それに違いないのであるが、知りたいのは先の「没我の我」である。それから「長生きをする言葉」、つまり「詩」を問題にしたいのである。ところがこの論者は直ちに詩そのものの場へ立ってしまつて、歌とはそうしたものと云うのである。この14は短歌について先の13は文学についての、何れも一場の談話である。次にしばらく芭蕉に関する評語を取つて、考えて行く。

15 「芭蕉は」人為に因らずして自然に基づく詩歌の真源泉を探り得たるところから、終に蕉風の俳諧を起し、「これを」詩歌と併列して愧ぢざる一体の短詩としたのである。(「自由二原文ノ一部ヲ省略」(「雲の影」 明40・4—全29・四〇八)

この「自然に基づく詩歌の真源泉」を既出12の「自家性情の自然に本づき」と対比する。どちらも似た表現であるが、論理の観念からは違つてゐる。前者は「詩歌の源泉」、詩の側に付いており、後者は「自家の自然な性情」の意、その人に属している。しかし作者はこの両文で恐らく同じ内容のことを言うのであろう。もともと人と詩は一つに考えられているのであろう。いま一文を取つて合わせ考察する。唐代の詩人杜甫(少陵)と芭蕉とを並べて論じ、両者に共通する性格として字句の推考という点を挙げる。

16 それ「類似点」は何かと云ふと、詩的良心、芸術的良心を欺かないで、如何にも其の真氣を保つたことである。(「芭蕉と西行

幸田露伴の芭蕉観 一思いやり・まこと・うた

・杜子美・黄庭堅」 7 既出—全25・五二六)

表現の適確を求めて再三考することをここでは「詩的(芸術的)良心」と呼んでいるのである。単に事柄が詩だから「詩的」と言つたのではないと考えられる。そうすると「詩的・良心」とはいわば二つが融合した一つの観念と言うことができる。そう思つて見ると、「純粹の↓感興」(11)、「自然の↓性情」(12)、それからまた「自然に基づく↓詩歌」(15)というのも、人か詩の一方へだけ即した表現ではなく、両者が一つに溶けた場から発せられた言葉だと考え直される。これまで筆者は主観(心)と客観(詩)とを分けて、その関係を煩わしいほどに求めてきた。露伴には確答があつたはずである。また全集のどこかには直裁の言が残されているのかも知れない。しかしたとえそれが得られなくとも、ここまでくればもうそれぞれの判断で理解するところに従つてよいであらう。

露伴はよく人の心を鏡や水にたとえ、それに映るべき外界をこれと対照し、さらに二つの関係に変化を与える波やひずみのことを言う。14に出る「心の画」がその一つである。この鏡に映る姿、この水に波だつ感情が詩として表わされた具体例を芭蕉の作品について言うことがある。1の付記で触れた逍遙当てる書信がその注目すべき一つである。どちらも鮮明な文章であるが、長文のことを思い、引用を差し控える。それら諸文の比喩を借り、その意味を取つて、私案を試みる。

心の鏡に映る事象、心の水に動く情念を静かにそのまま受け入れて、そのまま素直な言葉で言い表わすなら、これはもうその人だけのものではなく、他の人にも伝わるはずである。この際の感動がもし

深ければ、人への響きもそれだけに強いであろう。人と人との結び付きは思いやりや誠で高められる。歌い手と聞き手の場合も事情は同じであろう。さらにこう例えることができないであろうか。主観（一人称）、対象（三人称）、人々（二人称）、この三者が融合したところに「詩」がある。思いやりとまことはこの融合の触媒である。

芭蕉臨終の句に対する露伴の断案を掲げてこの項の結びとする。

17 旅に病て夢は枯野をかけ廻る——芭蕉（枯尾花上・I終焉）／笈日記上・I難波

二三／行状記・I行状一五

行脚に年を闊してゐた詩三昧の生涯を思ひ浮べて、みづから憐れみ、みづから慰め、みづから安んずる心である。さう云ふ錯雑した心持ちが此の句の感となつてゐる。螺鈿うでんの光りは青くも黄にも赤にも見えるところが尊いのである。自然といふものもさう云ふところがある。よい句にはそれがある。この句がそれである。

（『統芭蕉俳句研究』その十一—全25・三八八）

IV 跡書き 露伴の言葉解きはぐし、種類別に置き、改めて組み立てるといふような手続きをこの小考で取つてきた。そしてうまく成功しなかつた。これはもちろん考えの浅さと手際のまずさに因ることであるが、一面露伴のような行き方をする人にそんな分析的な方法を当てようとするのがもともと無理なのだと感ずる。そう思つて考えると、直ちにそのもの場に立つて、そこから部分や要素を見るようなあの直覚的な態度が何より最も芭蕉と露伴に共通する点だと言へるかも知れない。

18 蕉翁の語に、松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ、とあ

り。おもしろき教なるかな。松の画を松の画に学び、竹の歌を竹の歌に学ぶやうになりてこそ、世には松の画も竹の歌も無くならたるなるべけれ。（『統蕉翁語録』 明33・2—全15・一七七）

参照作品は全く『露伴全集』（昭24—33）に頼つた。発表年代など文献的な事項も一切この集の記載を借用した。引用例文は敢て原形通りとすべきことも知れないが、通用を旨として漢字体を当用のものに替え、送り仮名やルビを加えた個所がある。例文に添えた全10—一四などは巻数とページ数を示す印しである。この全集は露伴没後間もないころ、故人を追慕する念の厚い人々が寄つて、熱意と努力と時間とを注ぎこんで完成した貴重な成果である。こんど巻巻を座右に置いて、それを開くたびに恐恵の大きいことを切に思つた。なおこれは半面私事にわたるのであるが、『露伴全集月報』38号（昭31・12）に同じ筆者による『露伴と芭蕉』の小文がある。意に満たない書き物という記憶だけで中味をあらかた忘れていた。今この追記の所へ来て、初めて取り出し読み返してみた。この小考と旧稿とおのずから内容の重なる部分もあるが、目差す方向が違つてゐる。まずい点は同じであるが、空手形という所りだけは免れるかと期待する。